

細々と書き綴ってきた「見所の小雀」が今回 20 回目になりました。私が能観賞の記録を始めたのが 1999年5月からなので、ほぼ 20年。その記録の統計をしましたら、今までに観た能は 158曲、508番。最も多くみたのが「羽衣」で 13回。次は「道成寺」の 12回。「翁」「杜若」「融」「弱法師」がそれぞれ 11回です。能はよく 200曲と言われますが、その中の 158曲観ているのには自分なりに驚きました。しかし世の中には 3000番位能を観たと言う人がいますから上には上ですが、我ながら能キチの一人ではあると思っています。

これだけ沢山観ていると、記憶に残るものばかりではありませんが、「見所の小雀」として文章に残すと、さすが良く憶えていて私なりにはとても意義があります（読む人には重々、ご迷惑と思いつつ）。

「朝長」は謡曲としては前シテが女性で朝長の最後を語り、後シテは朝長の怨霊が出て来て戦を再現するという構成が異色で面白いのですが、余り演能が少なくて今年の 2月16日・横浜能楽堂で観たのが私にとっては 2回目でした。しかも今回は中入りの間に京都・相国寺の僧 10人が出演。舞台上で観音懺法（せんぼう）を唱えると言う特殊演出があって興味深く、素晴らしい能でした。しかし又、別な意味でも強烈な印象を受けました。

『朝長』 前シテ・梅若紀彰 後シテ・梅若実 ツレ・山中迺晶 トモ・山中景晶 ワキ・殿田謙吉 アイ・山本泰太郎 笛・一噌幸弘 小鼓・曾和正博 大鼓・河村大 太鼓・小寺佐七 地頭・観世喜正  
まずワキとワキツレの登場。殿田謙吉師はしばらく休演が多く病気かなとは思っていましたが回復された様子。しかしその面変わりに心痛みました。声も力がなかったけれど朝長は暗い物語だから或いは適役かなと思直した程。前シテの梅若紀彰師は、渋いけれど配色の良い草花を彩った唐織。僧との問答の後、下居の美しい姿をわずかに向きを変える所作以外微動だにしないまま、朝長の自害をする様子を語るところなど、観る者に緊張感と高揚感が伝わり完璧なまで素晴らしい名演でした。また別な観能記の時に書きたいと思っていますが、私は 15年位前に見た紀彰師の舞囃子に魅了され、それ以来注目していて、昨年からはとうとう後援会に入ったほどです。前場が終わった後、相国寺の僧侶達が登場し、太鼓と銅鑼を奏じ、次に 9人の僧によって観音懺法が 20分程繰り返し唱えられました。これはお経といえ音楽のようで私には教会で歌われるグレゴリオ聖歌によく似た感じがして、古今東西に共通な気がしましたし静謐な気分になりました。この観音懺法の法要によって後シテの朝長が現れるのですが…。この場面に私は、この日の能で最も強烈な衝撃を受けました。

源義朝の次男で頼朝、義経の異母兄でもある朝長は戦いに敗れ自害した時は 16歳の青年。烏帽子に白鉢巻。女面ではないかと思う程美しい面を付け、鮮やかなオレンジ色の法被（長絹？）に純白の袴。惚れ惚れとする姿なのですが、そのシテ朝長はナント揚幕から杖を突きながら出て、橋掛りの途中では床几に座って謡いだされたのにはびっくり！後シテの梅若実師が体調不良で1月公演は代役になったことは知っていましたが、このようにご無理をして能を勤められることに心底驚きました。後場は正直言えば観客として楽しむという感じより、ご無事に終わられるのを祈るような気持ちでハラハラして観ていました。ただ、舞台に穴を空けまいと言う実師の気迫というか責任感の強さは察せられましたが。

この公演は相国寺の声明との融合という点でも話題になり、多分数年前から計画されていて、実師の最近の体調を慮る事も出来なかったでしょう。名声、実力において余人をもって代えがたい梅若実師だからこそ、このような事態になったという事は十分理解出来ますが、いろいろ考えさせられました。

余談ながら今日、ドキュメンタリー映画「私は、マリア・カラス」を見てきました。子供の頃から厳しい訓練を経て、オペラ歌手として名声を得たマリア・カラスが、絶頂期にローマのオペラ座出演の際、気管支炎で声が出なくなり 1幕のみで休演。その後のバッシングの酷かった事！…。生身の人間の舞台。演劇以外の演者ドラマを観賞することでもあるとつくづく感じました。

尾崎 純子